

トン大学で政治学を教えており、現代共産主義問題の専門家である。(矢野 暢)

O. Gordon Young; The Hill Tribes of Northern Thailand, Siam Society, Bangkok, 1962 xiv+92.

著者 Oliver Gordon Young 氏は本書の序文によると、バプチスト宣教師 H.M. Young 氏の子として1927年雲南の山奥に生れ、ラフ族やワ族などの間で父について幼小の時代を送ったという。ヤング氏の祖父も宣教師としてビルマ北東部に生活した人で、3代に亘って山地民族と共に生活しているという。幼時すでにワ語、シャン語、カチン語、雲南語、ラフ語などを解したという。ビルマとインドで教育を受け、カリフォルニアのポリテクニク大学で牧畜の研究をしている。現在タイのチェンマイに住んでいる。北部タイの山地民族を自分自身の未開人への接触と、それらから得た知識によって書いた書物であるという。近年タイ北部の山地少数民族には社会的文化的経済的変化が劇しく、殆どが焼畑耕作民で短いものは5～6年、長いものでも、10～15年で移動する外に、チェンライ地方の Lahu Shi 族や、チェンライ、チェンマイ地方の Haw 族のように外部から近年移動し来ったものもあって、その研究は容易でない。本書にはこの近年の動向が示されている点で極めて有益である。取扱われている民族は、Blue Meo, white Meo, Gua-niba Meo, Skaw Karen, P'wo Karen, B'ghwe Karen, Taungthu, Akha, Yao, Lisu, Haw, Lahu Nyi, Lahu Na, Lahu Shehleh, Lahu Shi, Kha Htin, Kha Haw, Kha Mu, Lawa, Phi Tong Luang (Yumbri) の諸族である。個々の民族の記述は、系統、住地、人口、言語、宗教、村落、体形、経済、外部との接触、社会的慣習、村落統治、近來の動向の順序で書かれている。人口は全体で 217,000 というが、個々の民族の人口など家族数、村の家数、村の数などから一々推計されている。又言語についても言語系統の外に例えば Akha 族はロロの影響を受けたチベット・バーマンであるが、ラフ語70%、雲南語25%、ラオ・タイ語25%というように現在の実状が示されている。唯集団内部の社会構造についての分析は十分には示されていない。そして勿論個々の民族について割かれている頁数も多くはないので、夫々の民族誌という

訳にも行っていないけれども、外部から之等の民族に接触しようとするような場合には無二の手引となると思われる。多数の写真、8葉の表、6葉の地図も挿入されていて、楽しく読める書物である。(棚瀬襄爾)

Phya Anuman Rajadhon; Life & Ritual in Old Siam, three Studies of Thai Life and Custom, HRAF Press, New Haven, 1961 pp. 191

本書はアヌマン・ラヂャトンの3つの論作を集成した191頁の小著である。アヌマン・ラヂャトン氏には評者も面会したことがあるが、温厚の碩学で、チュラロンコンの前教授であり、もともとアカデミックな教育を受けたことはない由であるが、タイの民俗、文化については最も学識高き人として尊敬されている。三つの論作というのは「農民の生活」、「タイの民衆仏教」、「出産及び育児に関する習俗」である。「農民の生活」は1948年の作でタイ語で出版されたもの、「出産及び育児に関する習俗」は1949年に同じくタイ語で書かれたものが、ミシガン大学のタイ語教授である Dr. W.J. Gedney 氏によって1952年から苦心して英訳されたという。「タイの民衆仏教」はアヌマン・ラヂャトン氏自身が英文で執筆したもので、タイ研究で名のある Dr. Robert B. Textor がまとめて出版することをすすめて収録せられたという。ライフ・サイクルの中で結婚や死、或は病気等に対する民間療法などが十分取扱われれば、タイの民衆生活のうち重要な点は皆この書物で了解しうるわけである。タイの村落研究などこの頃では随分出ているが、タイの学者の書いたもので我々に利用しうるものは極めて少く、恐らく本書はタイ研究者の必読の書となるものと思われる。著者、訳者、助言者共に面識を得ている人々の作った書物というものも珍しいので紹介したのである。アヌマン・ラヂャトン氏にはこの外 Cultures of Thailand (Thailand Culture Series, National Culture Institute, Bangkok, 1953) という著作もある。(棚瀬襄爾)

R. M. Koentjaraningrat; Some Social Anthropological Observations on Gotong Rojong practices in Two Villages of Central Java, Cornell Univ. Ithaca, New

York, 1961 pp. 97

著者クンチャラニングラート氏はジャカルタのインドネシア大学の教授、インドネシアにおける社会学、人類学の第一人者で、1957年には A Preliminary Description of the Javanese Kinship System の好著をエール大学の SE Asia Studies, Cultural Report Series で出していること周知の如くである。ここに紹介するのは中部ジャワにおける二つの村の Gotong Rojong についての社会人類学的調査の報告である。Gotong Rojong というのは一般には村人間の協力の意味であるが、更に参加者の自発的協力とか、共同の福祉に貢献せんとする協力とかいう理想主義的な意味にも使われているという。しかし著者は現実的な Gotong Rojong の原理や社会的側面を明らかにしようとしている。Gotong Rojong は Bactiar Rifai (農学), Widjojo Nitisastro, J. E. Ismael (共に経済学) 等によっても注目され、インドネシアの村の理解の為に重要な概念である。本書でこの為に実態調査をした村は中部ジャワの二つの desa, Tjelapar と Wadjasari である。前者は外部との接触があまりなく、封鎖的な村であり、後者はハイウェイに近く開放化に向っている。この二つの村を選ぶことによって Gotong Rojong の変化の過程にも注目しようとしている。内容は(1)本書の目的、(2) Gotong Rojong の概念、(3) Tjelapar 村、(4) Wadjasari 村、(5) Gotong Rojong に関する資料記述の方法、(6) Gotong Rojong についての資料の分析からの若干の帰結で、各村の記述では、位置、住民、血縁紐帯、近隣、土地所有、収入源、日常生活々動など取扱われている。更に広く Gotong Rojong を調査し、比較研究するための第一着手であるというから今後の発表が期待される。本書はコーネル大学の Modern Indonesia Project の Monograph Series の一冊として出たもので、Clair Holt 夫人が英訳したものである。(棚瀬襄爾)

T. L. Reller, E.L. Morphet, (ed);
Comparative Educational Administration,
N. Y. 1962 pp. 438

比較教育学は、教育・文化の世界的拡大に伴って、近年にわかに脚光を浴びるようになった新しい学問であるが、本書は教育の組織と行政に焦点を合わせながら、世界の主要国における教育の傾向と問題およびその背景を分析し、「比較教育行政学」の一つのあり方を示唆しようとするものである。編者は、「現世代が——おそらくは次の世代もひとしく——直面する最も火急の、そして基本的に最も重要な問題は、教育である」という認識のもとに、比較教育行政の研究が「国内および国際的緊張の理解と解釈および将来におけるそれらの増減の可能性のいくつかに重要な鍵を提供する」ことを期待して、この本を編纂している。

しかし、第1章および第19章以下の若干の章を、比較教育行政の研究手法および2、3の問題、(教育の目的、統制、管理など)の分析と検討に当ててはいるものの、第2章から第18章にわたって世界の主要国のほとんどをもうらして紹介しているために、またその執筆者をそれぞれ異にするために、一つの論文としては多少モザイク的な感じを免れ難い。けだし、これは比較教育学のもつ一つの宿命的な性格であろう。また、それぞれの国の教育行政については、そのほり下げ方が足りないくらいはあるが、低開発諸国に関しては、文献が少ないだけに、一つの資料的価値はある。

東南アジア関係では、第12章でインドが現地出身の D.D. Karve によって、また第15章でフィリピンが編者の一人 E.L. Morphet によってそれぞれ紹介され、第18章の「組織と行政における傾向」では、パキスタンとフィリピンがそれぞれ他の執筆者によって扱われている。インドとフィリピンについては、いずれの場合も、教育の歴史的・社会的背景、教育の組織と行政、教員養成、大学の管理機関、教育財政、その他若干の問題と傾向などを知ることができる。

いわゆる「近代化」に教育が重要な役割をはたすことを考える時、また地域研究に先進諸国をも含めた総合的洞察が必要であることを考え合わせる時、本書は比較教育のみならず東南アジア研究に関心を寄せる人も一読してよい本ではなかろうか。編者は共にカリフォルニア大学教育学教授。(高木英明)